

## 1. 書誌ユーティリティ

NACSIS-CATのようなオンライン協同目録は、1970年ころ米国 OCLC で始まったとされている。北米では、OCLC に続き、カナダの UTLAS、研究図書館グループ (RLG) の RLIN、ワシントン州を中心とした WLN などが成立したが、現在では目録作成用の書誌ユーティリティとしては、ほとんど OCLC 中心となっている。ヨーロッパでは、各国事情が違うが、ほとんど国立の機関で運用されており、フランス、オランダ、ドイツ、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、イタリア、スロベニアなどにある。ドイツでは、国全体のユーティリティはなく、いくつかの州単位で運用されており、数個のユーティリティが存在する。アジアでは、日本に続き、韓国で数年前に成立し、中国で新たに成立しつつある。また、オーストラリアには、規模も歴史もかなりあるユーティリティが存在する。

これらの書誌ユーティリティは、いまやナショナルライブラリと同様に、ひとつの国の図書館・情報インフラストラクチャとして確立したものになりつつあると言っていいたいだろう。

書誌ユーティリティの出現とネットワークは、図書館の情報システムのみでなく、相互協力の枠組みを与えた。総合目録データベースが、いつでも、どの図書館からでも検索できるようになったこと、またそれを利用して ILL のリクエストが簡便に行えるようになったことは、ILL の取り扱い数を、情報化以前に較べ飛躍的に増やした。こればかりでなく、目録作成においても、普段に他の図書館の作成したレコードを参照しながら仕事を行うことにより、他の図書館との協力をより意識するようになった。

## 2. 書誌ユーティリティの接続

これらの書誌ユーティリティのほとんどは、国内という範囲で活動している。OCLC はヨーロッパ、ラテンアメリカ、アジアでもサービスを行っているが、その量は、英語圏での活動に較べればかなり少ないようである。しかし、最近、書誌ユーティリティのあいだのサービスの相互接続の動きが、徐々に起こってきている。

そのひとつの動きが、NACSIS-ILL と OCLC との間の ILL メッセージングシステムの接続である。これは、米国のいくつかの大学の日本図書館と日本の国立大学図書館協会との間で行われた、国際 ILL の試行に始まるもので、現在、OCLC と国立情報学研究所の間で、交渉中であるが、2001 年秋に、第 1 ステージが開始される予定となっている。

具体的には、NACSIS-ILL から、現在国立国会図書館や、BLDSC に ILL 申し込みができるように、OCLC

の参加館に対して、申し込みができるようになる。また、OCLC の参加館から NACSIS の参加館に対しても、OCLC の ILL システムを通して申し込みができ、こちら側では NACSIS-ILL を通じてそれを受け取ることができるようになる。とはいっても、少なくとも第 1 ステージでは、このような国際 ILL に登録した図書館（日米双方とも）のみを対象として、このようなメッセージを通す予定である。さらに、メッセージが通るといのは、いわば ILL 申し込みの郵便が送られるというのと同じレベルであり、これに対して受付を行うかとか、どのような種類の資料に対しどのようなサービスまで行うか、といったような ILL ポリシーは、各図書館で運用を決めることになる。

また、第 1 ステージでは、OCLC の参加館の所蔵情報が、NACSIS-CAT の参加館の所蔵情報のように見えて、それを参照して ILL 申し込みができるというわけではない。第 1 ステージ段階では、たとえば相手側図書館の OPAC を通じて所蔵確認を行い、NACSIS-ILL を通じて申し込むということになる。これを、NACSIS-ILL から検索することは、技術的には可能であり、今後の交渉と開発によっては実現するだろう。

ILL メッセージの接続以外では、目録データの検索が実現している。NACSIS-CAT でいえば、参照ファイルのような位置付けで、外部ソースの目録データをオンライン検索する方法である。たとえば、RLIN システムでは、ドイツ MARC をオンライン検索することができるが、このデータは RLIN システムにロードされているのではなく、ドイツ図書館のデータベースを直接検索しにしている。同様のソースとして RLIN は英国の研究図書館コンソーシアム CURL のデータベースもオンライン検索している。

### 3. 技術的基盤

これらの技術的基盤として、2 つの標準プロトコルが大きな役を果たしている。ひとつは、ISO 23950 (JIS X0806、ANSI Z39.50) であり、もうひとつが、ISO 10160, 10161 (JIS X0808, 0809) である。

Z39.50 は 2 つのコンピュータシステム間で情報検索を行うためのプロトコルである。もともと、米国の規格であるが、ISO および JIS にも採用された。その源流は 80 年代の半ばに米国の議会図書館 LC と 2 つのユーティリティ OCLC、RLIN の間で進められた LSP: Linked System Project にある。MARC データの供給もとである LC と、それぞれの参加館の総合目録を維持している 2 つの大規模ユーティリティとの間で目録データをオンラインアクセス可能にしようという計画であった。技術的には実現し、NACO (著者典拠の分担作成プログラム) などで利用されたが、当初の目的であった書誌ユーティリティ間のサービスとしては定着しなかった。むしろ、多くの図書館が自館の目録データを Z39.50 でアクセスできるようなサーバを開設することにより、多くの OPAC にひとつのインタフェースで (同時に) アクセスできる手段として広まった。

Z39.50 は、前述した目録作成における書誌データの参照のほか、一般的な情報検索、そして、拡張機能を利用した目録データのロード機能などに使用可能である。

ISO ILL プロトコルは、ILL のメッセージ交換のためのプロトコルである。NACSIS-ILL システムが行うような、ILL の申し込みから、受け付け、発送等のメッセージ管理を複数のシステム同士で行うためのプロトコルである。課金や複写物の電子的送付などは対象外である。たとえば、最初に述べたように、NACSIS と OCLC の ILL メッセージシステムをつなぐためにも使えるし、BLDSC も受付システムとして ISO プロトコル対応するようになった。

プロトコルとしては、各図書館のシステムが独立に ILL メッセージのレコードを管理する分散型の構成をとっている。(これに対して、NACSIS-ILL や OCLC の ILL のように一箇所ですべての、ILL メッセージのレコードを管理する構成を集中型という。) RLG は、RLIN-ILL という集中型の ILL メッセージングシステムを運用しているが、この ISO プロトコルと、複写物の伝送システムである Ariel とを組み合わせた ILL Manager という製品を出し、分散型の ILL 運用を目指している。

この両プロトコルとも、80 年代の標準化の世界に始まっているため、OSI を前提とした体系になっている。その後行われたほとんどの実装は、OSI ではなく、TCP/IP のうえ、あるいは ILL プロトコルなどは e-mail のプロトコル上に実装されているが、OSI の残滓(たとえば ASN.1 によるエンコーディング)は引きずっており、このことが、実装をやっかいにしている。

また、Z39.50 は、どんな内容のデータでも検索できるよう、検索キーのセットや、表示されるレコードの形式が登録できるようになっているが、クライアント側がこれに対応していなければ、結局は使えないため実質上それほどの自由度があるわけではない。

さらに、Z39.50 は 90 年代に多くの実装が行われ、実装側の意見を取り入れて多くの拡張がなされた。この結果として、Z39.50 は非常に「重い」仕様になってしまい、ますます実装しにくいプロトコルとなってしまっている。

#### 4. 図書館サービスのグローバル化

これら、書誌ユーティリティにおける、国際接続の動きは、今後において、利用者側の図書館に、何らかの影響を与えて行くだらう。それは、ちょうど、書誌ユーティリティが図書館に与えた、他の図書館とのつながり、協力活動のひろがりのように、日本国内にとどまらず、国際的な環境で新しい展開をもたらすだらう。

こういった動きは、2 3 年で急激な変化をもたらすことはなくても、5 年、10 年のうちに徐々に影響をもたらすだらう。そして、それは、いわゆる日本からの情報発信という点でも目に見えるものになっていくと考える。最後に、つけ加えると、日本の大学図書館の ILL サービスは、その充足率や、入手までの時間において、どうやら、世界に誇れるものであるらしい。このようなサービスが、国際的に見えるようになることも、また情報発信であらう。